
sacred forest——**聖なる森**

akira

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

s a c r e d f o r e s t — 聖なる森

【Nコード】

N 9 8 9 6 N

【作者名】

a k i r a

【あらすじ】

コイシロナツキ

結城夏生は現在29歳。離婚したのをきっかけに、仕事を辞めて下町で1人時間に拘束されない生活を送っていた。そこに世界放浪の旅から帰国した甥っ子が夏生の近況を聞いて訪ねてきた。久々の再会だったが、甥っ子は世界どこるか異世界を旅してきたなどあり得ないファンタジーを語りだした。

甥っ子帰国

姉の長男——つまるところ私の甥が、半年以上の海外放浪からこの程帰国した。

大学に入学してからというものの、バイトに精を出しているとは聞いていたが、まさか旅に出るための資金稼ぎだとは知らなかった。本格的に資金の目処がたってからは大学を休学し、母親の心配を余所に着々と出発の準備を進めていたという。

そんな中、私は三年の結婚生活の末にこの度離婚が成立した。どちらか一方が悪いとか、そんな理由ではきつと収まらない。一つずつ積み重なったものが、遂に均衡を崩した結果だった。

慰謝料はなし、子供もいなかったので親権やら養育費の問題もなく、共同の財産は話し合いで決着がついた。お互い三十歳前後と再出発するにも遅すぎることはないし、泥沼の争いとは程遠い、いわゆる協議離婚だった。

叔母と甥と言つには年齢が近かった私たちは姉弟のようなものだ
った。

帰国した甥っこが私の近況を聞きつけて連絡を寄こすのは、そう
遠くないだろう、そんな風に呑気に考えていたら、予想よりもそれ
が訪れるのは早かった。

しかもまさか、電話でもメールでもなく、直接目の前に現れると
は。

「久しぶり。ナツ姉」

そう言つて、すっかり日に焼けた甥っこ——大和は橋のたもとで
手を振っていた。

このときの私は気まずさばかりが胸の内を占めていて、まさか大
和があり得ないくらいファンタジーな旅をしてきたことなど、夢に
も思っていないかった——。

異世界へ

半年以上の世界放浪を経て、甥っ子が帰国した。

久々に再会すると、彼——大和は見事なまでに日に焼けていて、元々のガタイのよさも相まって最初は違う人種のようにさえ見えた。（近寄ってみるとそうでもなかったが）

それ以上に、放浪の過程が彼の精神にどう影響したのか、以前よりも大分精悍な顔つきになっていた。

温和そうな双眸は、柔らかさの中に強さが増したし、どこかドラ伊で達観したふうな物言いだったのが、それもケースバイケースで使い分けるといふ術を身に付けていた。以前が無口だったとかいうわけではないけれど、「相手に伝達する」という表現スキルが磨かれた感じを言葉を交わすうちに受けた。

言葉の壁や人種の壁を越えて、色々な人に出会った結果なのだろう。

「——はい、これお土産」

お茶の用意をしてリビングに戻ると、大和は何やら紙袋から取り出してローテーブルの上に置いた。

「お。ありがとう。どこのお土産？」

「どっつて言われるとな……」

大和はとぼけた風に笑って、何故か答えを濁した。

「まさか、忘れたわけじゃないでしょうに。大体、あんた半年もどこの国巡ってたのよ」

テーブルの上に置かれたのは、アンティーク調の装飾がされた小さな宝箱のようなものだった。

私は手のひらに載せて、色々な角度から観察してみる。

「色々と回ってきたよ。色々見たし、色々聞いたし、色々感じてきた。どことは言えない、全てが俺にとって知らない世界だった」

「何だか、妙な言い方ね。人生観でも変わった？」

「そうかもね。自分でも、帰ってくる前と今とじゃちょっと違う気がしないでもないよ。——まあ、帰国して一番驚いたのは三沢夫妻に起こった変化だったわけだけど」

三沢、というのは私の元夫の姓で、つまるところ私の一カ月前までの姓になる。

「……それは。まあ、ね」

「ナツ姉、仕事も辞めたんだって？ まあ、こんな平日昼間っから下町の川沿い何か散歩してるところを見ると、とても都会のビジネス街を闊歩しているはずの人とは思えないけどさ」

「私にも、色々と考えるところがあつたの。ちよつと、一休みするいい機会なんじゃないか、って」

「俺がいない間に一体何があつたんだかねー。母さんにも、じい様にも、詳しいことは話してないんだろ？」

「もう、自立して何年だと思ってるの。それに、こんな話出来るほど……まだ私だって色々と生々しくて……無理」

思わず手にしていた箱を置いて、大和の視線から逃れるように顔を俯けた。

若いのに妙に達観したところのある大和は、その語り口は柔らかでも、一度視線を合わせれば何もかも見透かされているような心地になる。

「そっか」

「……うん」

私は頷くと、用意してきたお茶をカップに注いで大和の前に置いた。

「サンキュ。……あのさ、思い出した」

唐突に、大和はそんなことを言い出した。

「え、何を？」

主語が無く、その発言の意図がつかめず私は首を傾げる。

「行ってきた国の名前。——ギルトリーデルア」

ギルトリーデルア、耳慣れない響きだった。小さく復唱してみる。

「そう、ギルトリーデルア」

「あまり聞かない国ね。東欧の方とか？」

「いや、違う」

「じゃあ、中東？」

私が次々とエリアをあげても、大和はまったく頷こうとはしなかった。

「違うんだ。ギルトリーデルアはこの世界には存在しない」

「は？」

「俺たちが生きている世界とはまったく違う世界にある国なんだ」

「……え」

「何言ってるのかさっぱり、って顔してる。……まあ、そりゃそうか」

苦笑を浮かべ、大和はソファに深く体を預けた。仰向けに近い体勢になり、その視線はどこか遠くを見つめている風だ。

「大和……？」

「香港の街中でちょっと迷子になってさ。路地を彷徨っていたら、ある古道具屋にたどり着いたんだ。そこで見つけたのがその箱。何となく手に取って開けてみたら、実はそれが異世界への扉だったわけ」

当時の様子を思い出しているのか、大和は小さく肩を揺らしながら「あの時は参った！」などと笑っている。

一方の私は、未だに彼が何を言っているのか理解しきれていない。
「ねえ、一体何の話……？」
困惑したまま尋ねると、大和はニヤッと不敵な笑みを浮かべたか
と思うとこんなことを言った。

——俺、異世界に行ってきたんだ。

——何で。何でこうなるの。
私の頭は色々とパニックだった。

周囲には、緑、緑、緑。見渡す限り樹々が生い茂る、森の中。
先ほどまでいたはずの、自宅の玄関の風景などどこにも見当た
らない。

「……え。えええ」

言葉にならない衝撃とは、正にこのことか。

どうやら私は今、本当に異世界とやらにやって来てしまったらしい。

呆然と周囲を見渡していると、頭上からクスクスと笑っている気配と、甥っ子の声が降ってきた。

「まあ、そりゃ最初のリアクションはそうだね。——さて、ナツ姉。ここが、異世界。そして西の大国ギルトリーデルアの聖なる森へようこそ」

……ようこそ、って何だ。

お迎え

甥っ子に「どうせ失業中で暇だろ？」と半強制的に連れてこられた、そこは、やはり異世界とやらであるらしい。

見渡す風景が明らかについ先ほどまで自分が見ていたはずのものとは違っていることから、徐々にその状況を実感していく。指先が冷たい。背中もなんだかいやに涼しい。

自分の中だけではどうにも消化しきれないこの不安は、当然ながら私をここへ連れてきた張本人であるところの甥っ子にぶつけるしかない。

「……ねえ。ここ、やっぱり、その」

「——異世界。ギルトリードルア」

即座に、というより瞬殺のごとく返された。

「何で、さっきまでうちの玄関にいたじゃない」

向こうは森だから、などと訳の分からないことを言ってトリップする前に玄関で靴を履くよう言われた。言われるままに靴を履けば、一瞬にして視界は真っ白になり、気付けば森の中にいたのだ。

「靴、履いておいて正解だっただろ」

「まあ、それはそうだけど……って、じゃないでしょう！ 何をどうしたらいきなりこんな森の中にやってこれるわけよ。アンタ、まさか超能力者だったとか……」

「ハハハ。残念ながら、それは違う。——これだよ」

言って、大和はポケットに突っこんでいた、あのアンティーク調の宝箱を取り出した。

「これが、異世界への扉になってるらしい。ただし、一方通行の」

「一方通行……向こうからこっちに来れるだけってこと？」

「ご名答。こいつを開くとこの森へ飛んでこられる。けど、こつちにいるときにこいつを開いても、向こうに行けるわけじゃない。だから、一方通行」

「へえ。じゃあ、私はどうし…た…ら…ん？」

その時、ガサガサと草をかき分ける音がどこからか聞こえてきた。それは、どうやらこちらへ近づいてくるようで、どんどん大きくなっていく。

まさか猛獣とかの類じゃないよな、と動悸が激しくなっていく私を他所に、大和は暢気に呟いた。

「お。お迎えかな」

「は、おっ、お迎え…？」

ガサガサ、という音はもうすぐそこだ。さっき一瞬黒い影も見えた。相当大きいんじゃないの、あれ。

正体不明の巨大物体と、加えてこの状況にまったくと言っていいほど動じていない大和の両方に恐怖を感じ、私はじりじりと後ずさりする。

そして、遂に巨大物体は背の高い草をかき分けて私たちの前にその姿を現した。

巨大物体、それは――

「……馬、と。人間……？」

現れたのは、栗色の毛をした大きな馬と、それに跨る少しくすんだ金髪の、お兄さん？

「よう、久しぶり」

大和は馬上の男へと手を振った。

「えっ、ちょっと。そんな軽いノリで大丈夫なの？ ……あの人、腰に下げてるのとか、すごい物騒なんだけど？」

「大丈夫。知り合いだから。ちゃんと紹介するし」

「……紹介って」

男は馬から身のこなし滑らかに地面へと降り立つと、私たちのもとへ近づいてきた。

ブロンドの彼は濃紺の軍服のようなものを身に着けており、腰には長剣が一振り。職業軍人さんなのだろうか。

「やはりお前か。大聖女が森が揺れたと言うので様子を見に来たんだが……今回は連れも一緒なのか」

そういつて、彼は視線を私へと向けた。

「ああ。俺の叔母。とはいえ、歳も近いから姉弟みたいなもんだけど」

「……はじめまして。大和の叔母の結城夏生です」

まだ動悸は収まっていけないものの、紹介されている模様なので、恐る恐る口を開いた。

「エドガー・アールストレームだ」

耳慣れない響きは、まるで呪文のようだ。名乗られても正直……あ、れ？

「ん？」

思わず首をかしげる私に、大和は「どうかした？」と眉をあげた。「え、だって……何で日本語？」

自分とエドガー・アールストレーム氏を交互に指さす。

「さあ」

「さあって！」

「俺も最初疑問に思ったけど、理由はわからなかった。よって、通じなくて不自由するよりは良いかなと思って受け入れた」

「ふあ、ファンタジー……」

「そう。ファンタジー。な、副隊長……いや、もう昇進して隊長？」

「ああ。少々不本意ではあるがな」

何やら複雑そうな表情で、アールストレーム氏は肩を竦めた。

「そうか。まあ、そうだな」

どうやら大和もその事情を知っているらしい。何やら二人して湿っぽい空気を醸している。

昇進だなんて、普通なら喜ばしいことなんじゃないのか。

この場において、二人にしか分からない雰囲気を出されても困る。ただでさえ異世界初心者だというのに、この状態のまま放っておかれるのは些か辛い。

森の先には

あちらとこちらは、あの宝箱によって一方通行ではあるが繋がっている。

本来の私たちの世界のどこにいても、ひとたび宝箱を開けばこのギルトリーデルアの「聖なる森」にやって来ることができる。

「ただし、森のどこに落とされるか分かったもんじゃない。毎回来るたびに迷子になってる。だからこうやって迎えに来てもらわないと。な、エドガー」

近衛騎士団の隊長だというアールストレーム氏をファーストネーム（しかも敬称略）で呼ぶなど、大和と彼は相当フランクな仲らしい。

近衛つてことは王族の護衛とかやる人なわけで、しかもその長たる人なわけで、世間的にはなかなかの地位にある人だと私は思うわけ。

そんな人をそんな呼び方してしまうだなんて、我が甥ながら本当に恐ろしいやつだ。

「まあ、大聖女が大方の位置は示してくれるがな」

馬の轡を牽きながら先頭に行く近衛隊長がそう答えた。

森には彼と同様に、他にも近衛の人が入っているらしい。

その人たちと合流するため、私たちは草むらを進んでいた。この先に道があるのだという。

「その、大聖女っていうのは？」

「尼さんの最高位つてところか。大聖女は今三人いるらしいんだけど、そのうちの一人が王宮内の聖堂にいる。『森が揺れた』ってのは、大聖女が俺たちの来訪で森の気配が変化したのを感じたってこと」

「へええ。そういう異能を持つてるわけね……ますますファンタジーだわ」

「大聖女たちは皆強い力を持っているってのは確かみたいだけど、俺が知ってる大聖女は普段はお菓子好きな、年ごろの女の子にしか見えないよ」

「お菓子好き……」

「そう。ひとしきりお勤めとやらが終わると、毎日のように厨房でお菓子教室開いてる」

大和も参加したことがあるのか、そのときの様子を思い浮かべながら話ているようだった。

お菓子好きの異能者……の、女の子か。どんな人なんだろう。

草むらをかき分けて進むと、本当に道に出た。

かき分けた、とは言っても、実際私はアールストレーム氏と栗毛の馬と大和の後ろにひつついて歩いていただけなので、それほどかき分けた実感というのは無いのだけれど。

ともかく、道には出ることができた。

至極当然のように、日頃私が目になっているようなアスファルトで整備されているような道では無かったわけだが。先ほどの草むらよりは、余程「道」と言えるものではあった。

アールストレーム氏曰く、本来聖域であるこの「聖なる森」は必要最低限の手入れを除いて、ほとんど人の手は加えられていないらしい。森に入るには、王族が大聖女いずれかの許可が必要とのこと。「この森自体がこの国にとって神聖なものだから。特に森の中に

何かがあるわけではない。まあ、最近では専らあの男を迎えに行くという仕事が出来たが」

アールストレーム氏は小さく口の端で笑うと、そんな皮肉を言った。

やはり男前である。

「はあ。それは、甥がとんだご迷惑を……」

私はこれまで以上に恐縮した。

何せ、こんな、ただでさえ、

——騎士団隊長様の馬に同乗させて頂いているってのに。（しかもその胸に抱えられるようにして）

隊長様の部下の方々と合流すると、そこからは全員騎乗して城に向かうことになった。

大和は何と、一人で馬に乗っている。一丁前に。

もちろん乗馬経験もなく、一人で馬を乗りこなすスキルなど皆無である私はどなたかの馬に同乗することになった。

そして、この現状。

男前に抱えられて馬に乗るなんて、何てロマンチックなことだろう。

ところが人と一緒に乗ったこともないので、どこにどう体重をかければいいのかも分からず、必死に鞍の端にしがみついているだけで精一杯。

それほどスピードは無いにしても、大きな馬だけに高さはあるし、振り落されれば大なり小なりただでは済まないと思うと、もう……。そんな様子を不審に思ったのか、隊長様は「気分でも悪いのか」と声をかけてくれた。

「いえ。その、馬は初めてなので、どうも勝手が分からなくてです

ね……」

しかもこのアールストレーム隊長様、お城の騎士団の隊長だと言
うじゃないか。

それって、日本で言うところの何。皇居警察の何とか、みたいな
感じなんじゃないだろうか。

てことは、もしかや相当なエリート軍人とか。

「そういえば、あちらでは鉄で出来た乗り物が空を飛ぶんだったか。
そんな世界では、日頃馬になど乗らないのも仕方がないな」

「ええ、まあ。いないことはないですけど、私の国の街中では見な
いですね」

「そうか。城まではそう遠くないし、間もなく森も抜ける。それま
では悪いが耐えてくれると助かる」

「……了解です」

彼の言った通り、目前には森の出口が迫っていた。

森独特の薄暗さも、徐々に和らいでいく。地面に落ちる光の面積
がどんどん大きくなる。

そして遂に森を抜けると、そこは丘になっていて、眼下には同系
色で統一された街が広がっていた。

「何だか、大きな生き物みたい」

思わずそんな感想を呟いたので、私のためにかアールストレーム
氏は馬を止めてくれた。

それに気付いた部下の方が振り返ったが、隊長様は身振りで先に
行くよう合図した。

「——生き物か。確か大和も初めてこの景色を見たときにそんなこ
とを言っていた」

「え、そうなんですか？」

「ああ。俺には思いつきもしなかった発想だ」

「ごめんなさい。何か、失礼な感じでした？」

いや、と彼は首を振った。

「大和の話すあちらの世界のことは実に信じられないことばかりだが、ものの見方という点でははつとさせられることも多い。王宮の中にあつて、俺は視野の広い方だと思つていたんだが、そんな自負も崩された。この街を生き物のようだと言つたことも然り。これは大和とあなたの持つ血なのか、それともあちらの人間ならば持ち得る感性なのかは分からないが」

何やらあの一言でそこまで感慨深い想いを抱いてくださつたらしい。

ただ、血のつながりという点では、私と大和の関係性は極めて薄いと言える。

それは第三親等であるとか、そういう理由からではない。

「……血、ですか。どうでしょうね。私たちが似た感性を持つているとすれば、どちらかと言うと育つた環境が同じだったほうに要因があるかもしれません。私と大和では、少し系統が違つので」

「系統……？」

何か引つかかった、というような顔を浮かべた隊長様であつたが、私は意図してその違和感を無視した。

「あ、あれがお城ですか？ 真っ白」

「ああ。では、そろそろ行こう。少し走らせるから、舌を噛まないように」

森の先には（後書き）

なかなか城にたどり着きませんね……。話がこま切れるにしか進行しません。が、ご容赦を。

今後ともよろしくお付き合いください。

a k i r a

ピンクの襲撃者

「ホント、真っ白」

聖なる森と丘続きの高台にそびえ立つ、白亜の城を見上げて、私は思わず感嘆の声を漏らさずにはいられなかった。

「あいつらは、もう城に入るところだな」

言われて視線をずらすと、道の先に門が見えてきた。そこから城に入るのか。

大和たちの乗った馬は、すでに門の直前まで到達しているようだった。

「……遅れちゃいましたね」

「いや、気にするほどのことではない。だが、少し早める。——舌を噛まないように」

はい、と返事をする間もなく、隊長様は馬の腹をお蹴り遊ばした。変化した振動で、反応の遅れた私の体は背後に傾いた。ヒヤッとしたものが背中を走ったが、すぐにがっしりとした胸板によって支えられる。

男らしい久々の感触に、思わずドキッとしたのはここだけの話だ。私が窺うような視線を上げると、隊長様の青みがかったグレーの双眸とぶつかった。確かに視線は合ったのだが、隊長様は表情を変えることなく一瞬でまた前方に向き直った。

はいはい、別にこれしきのことどうってこたあないですよ。お仕事ですものね。勝手にときめいていたのはこの私めでございますよ。

何一瞬でも浮かれたんだ、このバツイチ女。しばらく人との接触を避けるような生活送っていたから免疫力でも落ちたのか。

速度が増したにも関わらず姿勢が安定したことで、余裕ができたらしい私の脳内では人知れずそんな思考がめぐっていた。

庭に面した回廊を通つて案内されたのは、応接間と思しき一室だった。

部屋の中央には揃いのソファが並んでいる。

隊長様こと、エドガーさん（隊長さん、と何かの拍子に呼んだら却下されたので）は「報告してくる」と言つて部下の皆さんを従えてどこかへ行つてしまった。

大和は勝手知つたる、といった感じで部屋に入るなりあつという間にソファに腰かけた。部屋の中をきよきよと見回して入口付近で突つ立っていた私に「座れば？」と暢気に声をかける余裕すら持っている。

言われて、大和の座る長椅子の横にある一人掛けのソファに腰かけた。

布地はベルベットのようなもので、大変手触りが良い。控えめな柄がかえつて高級感を際立たせている。ノックの音と共に、茶器一式をワゴンに乗せた女性が現れた。

「失礼いたします。お茶をご用意させて頂きました」

「ああ。ありがとう」

まるで部屋の主のように悠然たる態度で、大和はそう言った。

何てやつだ、お前は。

ハラハラしながらその様子を見守っていると、女性は手際よく尚かつ上品にお茶を淹れると、にこやかに私たちの前にカップを置い

てくれた。

「あ、ありがとうございます」

私がお礼を口にする、彼女は再びにこやかな面持ちで頷いてくれた。

「何かご入り用ものなど御座いましたら、何なりとお申し付けくださいませ」

言って、彼女はそのままワゴンの横に控えた。

その時、遠くの方から徐々にこちらの方へ騒々しい音が近づいてくる気配がした。

「――来たか」

ポツリ、と大和が何だか妙に渋い顔で呟いた。

別にこのお茶は渋くなんてない。むしろ、大変美味しいではないか。

そうこうしているうちに、もの凄い勢いで部屋の扉が開かれた。

「ヤマト、ここにいますのしょう……！？」

何だ、このふわふわとしたピンクの生物は。

その生物は銀色と見紛う巻き毛のブロンドに、白く小さな顔。そして華奢そうな体には、淡いピンクのひらひらを身に纏っていた。

「まあ、ヤマト！ やはりまた帰ってきてくださったのね。私に会うために！？」

入口に背を向けて座っている大和は、どうやら少々興奮気味のふわふわした生き物――年の頃15歳といったところのこのお姫様にも背を向けている。そして一向にそちらを見ようとはしない。しかも眉間にしわが寄っているのは私の気のせいでは無いだろう。

「もうツ、つれないのね！」

見向きもしない大和に痺れを切らした……にしては、全く気にした素振りなどなく、寧ろ全身からキラキラした何かを発しているの、それすらも嬉しそうなお姫様は、背後から大和の首に抱き付いた。

おうおうおう。叔母の目の前でいちゃつくだなんて、度胸あるわ

ねお姫様（呆然とするあまり、棒読み）。

「離してくれないか。アンナリーナ」

「いやよ、久々の再会なんですもの。それに、私のことはアンとお呼びになって」

アンナリーナというらしいお姫様は、いやいやと首を小さく振ると、いつそう強く大和に抱き付いた。

まだ僅かにあどけなさを感じさせる少女であるというのに、何とも積極的である。寧ろ、幼さ故に駆け引きというものをまだ知らないのか。

大和はカップを持ったまま、重々しい嘆息を漏らした。

森に続き、ここでも再び放置プレイを食らうのが私の役回りなのだろうか。誰かこの状況を説明して欲しい。

しかし、エドガーさんがタイミングよく現れることも、メイドさんが解説してくれる気配も無い。

「……ええと、大和君や。そちらは君の新しいガールフレンドなのかい？」

困惑気味に尋ねると、大和は依然として渋い顔で手をひらひらとさせた。

どうやら否定のボディラングージらしい。

「違う」

「違いますわ!」

「アンナリーナ」

「アンとお呼びになって!」

「……ちょっと、お二人さん」

おいおい、痴話喧嘩ですか、それ。

「彼女は、この国の第二王女。アンナリーナ・シーヴ・ルド・ギルトリーデルア」

大和が何やら長つたらしい彼女の名を告げると、そこでようやくお姫様は大和に巻きつけていた腕をほどき、ソファアの横に移動して優雅な動作でお辞儀をした。

「アンナリーナです。お初にお目にかかりますわ」

ピンクのお姫様は、本物のお姫様だった。

「王女、様、ですか……こちらこそ初めまして」

相手が王女様なら、こちらら庶民なわけで。跪くのはさすがにアレなので、一応立ってお辞儀を返した。

大和や、君は一国の王女に惚れられてるのか。何者だよ、ホントにもう。

「彼女は結城夏生『ゆいしろなつき』」

「ユイシロ、ナツキ、……ということは、ナツキがお名前で、ユイシロが家名ですね。あら、ユイシロって、確かヤマトも同じ家名でなくて？」

王女様は日本人の名前の順序を既に理解していた。

エドガーさんが飛行機のことを話していたことといい、こちらの人々に大和は色々と私たちの世界について話しているらしいことが窺えた。

「ああ。俺も彼女と同じユイシロだ」

「まあ。では、もしかしてあなたがヤマトのご兄妹かしら？」

大和には妹が一人いる。私の姪っ子だ。もしか、彼女が私だと思っっているのだろうか。

それは、さすがに年齢に無理があるよ、王女様……何だか虚しいのはどうしてだろう。

「いえ、違いますよ。大和より私の方が年上ですし」

「あら、じゃあ、従姉かしら？」

うちの事情を知らないならば、元々私を一度で「叔母」だと言う人の方が少ない。

それはどうやら異世界でも変わらないことのようにだ。

「いいえ。私は……」

「まさか……大和、あなた、もしかして結婚してらしたの!？」

「は……?」

だからといって、何故そうなる!

チラと大和の方を見やると、彼もポカンとした表情を浮かべていた。

ところが、次の瞬間、ニヤリとその口角を上げたのを私は見逃さなかった。

まさか……。

「だったら、どうする?」

おいおいおい。

「何てことなの! 私というものがありながら!」

「実は……ここへ来る前から」

「まあッ!」

そんなに意地の悪い子だったとは知らなかったよ、叔母さん。
大和の言葉にいちいち反応する王女様も、大変意地らしい。

猫かぶり王子の微笑み

「アンナリーナ、いい加減にしておけ」

開きっぱなしになっていた扉から、ピンクの王女様に続いて現れたのは、これまた見目麗しい少年であった。

凜々しい顔立ち。王女と同じ銀に近い金髪と、透き通るような青い瞳。

「私はアウグスト・クラウド・ルド・ギルトリーデルア」

彼はそう名乗り、私の手を取った。

ちよっ、あの……！

手の甲に口付けることはなかったが、彼は腰を折って私の手を自分の頭上ほどまで軽く持ち上げた。

……これが貴族の挨拶デスカ。

「は、はじめまして。結城夏生です。大和がいつもお世話になってます」

「いえ、僕の方こそ彼にはとても助けられているんです」

「はあ……そうなんですか？」

「クラウドはここの二番目の二王子。——それと、別に今猫かぶる必要はないぞ」

……猫？

大和の発言に首を傾げると、目の前でにこにこしていた王子の表情が一瞬ひきつった。

どうにかして耐えようとしたようだが、結局あきらめたらしく先ほどの見事な王子っぷりはどこへやら。みるみるうちに肩の力が抜けていく。

「……大和。初対面の人の前くらい、良い恰好したって構わないだろ」

恨めしそうに悪態をつく王子は、雰囲気までもがガラツと変わってしまっている。

とはいえ、もとの育ちの良さは誤魔化せないようだ。いくら肩の力を抜き微笑みを消したとしても、軸が通ったような姿勢や放つ存在感は並みのものではない。

「そのうちバレるんだ。初対面で被った猫なんて意味が無い」

「それは、まあ……いや、それより！ アンナリーナの声が廊下まで響いてたぞ」

返す言葉に窮した王子は、妹姫に話の矛先を向けた。

突然の振りに、アンナリーナは美しい動作で手を口元に寄せて驚きの表情を浮かべた。

——リアル、宝塚。

「あら」

「あら、じゃないだろ。気分が高揚しているのは分かるが、少し慎め」

「ごめんなさい、お兄様」

「謝るなら俺じゃなくて、ヤマトだろ。誰がどう見たってお前の好意は一方的だ。こいつも迷惑している」

おお、なかなか率直なお兄様だ。

「何てことを仰るの！ 酷いわ！」

「そうそう、ところでヤマト。お前、結婚してたのか？」

「は？」

アンナリーナの抗議を無視して、王子は大和に視線を向けた。

「いやだって、さっき聞こえてきたから。それとも俺の聞き間違いか？」

「ああ。あれか。いや、アンナリーナが彼女のことを俺の奥さんだと思っただけ。名字が一緒だからな」

大和は私の方を示しつつ、王子に説明した。

「アンナリーナの勘違いか。エドガーからは、彼女はお前の叔母にあたる方だと聞いているが」

「叔母ですって!？」

置いてけぼりだったアンナリーナが物凄い勢いで私を見た。美少女ゆえに、凄い迫力だ。

「はい、叔母です」

「俺の母親の妹なんだ。叔母っていうにも、わりと歳が近いから姉弟みたいなもんだな」

「そうなのか」

「どういうことですか!?　だってさっき!」

「俺は肯定した覚えはない」

「……………私をからかいましたのね!？」

驚愕の表情で大和を見上げるアンナリーナ。

——宝塚。

「もっつ、ヤマトはそんなに私が疎ましいんですの!？」

「おい、アンナリーナ。いい加減にしてやれ。ナツキ殿の前なんだし」

殿!?　今私の敬称に殿をお使いになりましたか、王子!?

「うっつ。私、失礼しますわ!」

軽やかに踵を返し、アンナリーナ姫はあっという間に部屋から出て行ってしまった。

おいおい、泣いてたんじゃないのあれ?

振り向く反動で目元からなにやら光の粒が空中に散った気がしたけど。

それはまるで、少女漫画のワンシーンのように完璧な構図だった。
「良いんですか……？」

ドアの方を指さし言ってみるが、王子も大和も肩を竦めるばかりだ。

「すみません。思春期なもので」

「思春期ですか……」

いやいやいやいや。王族が思春期って表現を使うと、ここまで違和感があるものなのかね？

それにアンナリーナ姫のあの性格とかは、思春期ってだけじゃあ片づけられないと思うけど。

紹介の流れがひと段落つくと、エドガーさんも戻って来たので私たちは淹れなおしてもらったお茶を頂くことになった。

先ほどの女官の方が再び無駄のない所作でお茶を淹れ、私たちの前にカップを置いていった。今度は先ほどとは別の茶葉を使ったらしい。香りが違っていた。

「ヤマトとは姉弟のようなものだということだが、失礼ですがナツキ殿はおいくつでいらっしゃる？」

カップに口をつけていた王子は、ふと思いついたようにそんなことを聞いてきた。

しかもまた殿ってつけてるし。

「……あの、その敬称は結構です。どうもむず痒くなっちゃうので、出来ればやめてもらえますか？」

「そうか。分かった。ではナツキと呼んでもよろしいか？ 俺も本来堅苦しいのはあまり好まないから」

「どうぞ、どうぞ」

おお、王子。徐々にフランクな感じになってきたぞ。

しかし足を組んで紅茶飲んでる姿はホントにハマってるな。 「貴公子」ってのはこういうのを言うのかも。

「——それで、俺の問いには答えてもらえのかな？」

王子はそう言って、悪戯っぽく私に微笑みかけた。

かげり

私が年齢を告げると、クラウド王子は一瞬瞠目した。どうやら彼の予想よりも、私は歳を食っていたらしい。

「ヤマトから、歳の近い叔母がいると聞いていたからな。近いと言うぐらいだ、ヤマトとそう変わらないと思っていたんだが」

「十分叔母と甥にしては近い年齢差だと思いますけどね。七歳差なんて」

「そうか？　こちらでは、結構いるんじゃないか。なあ、エドガー？」

「まあ、そう多くもないですが。聞くところによれば、こちらとそちらの世界では婚姻に関する常識にも違いがあるようだ」

大和はどうやら、あつちの世界の結婚の常識まで解説しているらしい。

「そういえば二十九歳というと、お前と同年なんじゃないか、エドガー？」

「俺は三十歳ですよ、殿下」

「そうだったか。遂に大台に乗ったな、お前も」

大台つて……こつちでも、二十代と三十代の間には大きな何かがある、みたいな概念が浸透しているのか。

「しかしヤマト、良いのか？」

王子はテーブルに置いてあったカップに手を伸ばしかけて、途中でその動きを停止した。

何事だ。

「何がだよ？」

「お前、依然『叔母は結婚している』と言っていたな。夫がいるナツキをそうやすやすとこちらに連れてきて構わないのか？　こちらに来れば、そう簡単には帰れないのだろう？」

……そんな個人情報まで喋ってたのか、君は。今度から、おしゃ

べり大和君と呼んであげよう。

「……ああ、まあ、な」

さすがの大和も、口調が濁った。
チラ、と視線が私に向けられた。

……… ったく。自分で言えってか。

「それは、良いのよ。まあ、本当のところは良くないのだけれど。
——私に夫と呼べる人はもういないから」

今度はカップを持っていた王子が、二度目の瞠目を繰り返した。
エドガーさんも、一瞬動きが止まる。

「ナツキの夫は、亡くなったのか？」

「全然。今頃もピンピンしてるんじゃないかな。別に死別したとか
じゃないのよ。離婚したの、私。それもついこの前にね」

言い切って、肩を竦める。

「離婚……離婚したということか？」

「そうなるかな」

「そうか。それは……… すまない。気分を悪くさせてしまったかもし
れないな」

申し訳なさそうに謝られた。

しかし、その口調は決して湿っぽいものではなかった。

何度が離婚の話題が上がるたびに相手の過度の同情や気遣いを受
けてかえって鬱陶しく感じたりすることもあったが、この殿下には
それがない。かといって冷たいわけでも淡泊というわけでもなさそ
うだ。適度、という言葉がしっくりくる。

「気にしないで。なるようになった結果だから」

私も出来る限り湿っぽくならないよう、あえて何でもないような
表情をつくった。

女官だと紹介された女性に案内されて、客室らしき部屋に案内された。

扉がえらくデカイ。天井まで届く勢いだ。……というのは大げさかもしれないが、3メートル届かないくらいはあるんじゃないだろうか。

「こちらのお部屋です」

扉を開くと、私を先に中に入れてくれた。

「こちらが居室。奥にあります扉は寝室へ通じております。そしてこちらの扉を開けますと、浴室がございます」

数歩足を踏み入れると、そこはもう一流ホテルのスイートか、どこぞの城の一室のようだった。

……いや、そうだった。ここはお城なんだった。

きよろきよろと視線を動かしていると、女官の女性が微笑を浮かべて私の表情を窺っていた。

「あ、すみません。落ち着きなくて……」

「いいえ。何かご入り用のものなど御座いましたらなんなりとお申し付けくださいませ」

そういうと、女性は自分はクラウド殿下付女官のルイザだと名乗った。

「本日、クラウド殿下がヤマト様とナツキ様をご夕食にお招きなされたいそうですが、いかがでございますか？」

私を部屋に誘えられた長椅子に促すと、その横に立ったルイザはそう尋ねた。

「それは、もちろん。よろこんで一緒にしたいです」

「かしこまりました。そのようにお伝えいたします。ご夕食まではまだお時間がございます。お召し物もお着替えになられた方がよろしいかと存じますので、先にご入浴されますか？」

言われて自分の身体を確かめると、色の濃いデニムだからあまり目立っていないものの、細かな泥汚れやらが付着していた。

こんな恰好で暢気にお茶なんぞ頂いていたのか、私は！？

「……ぜひお願いします」

「かしこまりました。すぐにお湯をご用意いたしますね。ひとまずは、バスローブにお着替えください。寝室にご用意してございますので、ご案内いたします」

ルイザは寝室に入ると、クローゼットの中からバスローブと寝間着のような一式を取り出した。

「こちらでございます。お手伝いいたしますので、今着ておられるお召し物をお脱ぎになってください」

「あ、はい」

と言って、何とはなしにそのままＴシャツの裾を捲ろうとしたところではつと気が付いた。

「あ、いや、その……私着替えを手伝ってもらうという習慣が無いので、出来れば一人で着替えたいんですが」

私の言葉にバスローブをベッドの上に広げていたルイザは手を止め、顔を上げた。

「申し訳ございません。気づきませんで……そういえば、ヤマト様も同様のことを仰っておいででしたのに」

「あ、いいえ。謝ってもらうほどではないんです。その、着方だけ教えてもらえたら自分ですぐにかしますから」

バスローブはまだしも、寝間着はいわゆるネグリジェっぽいもので、そんなものを身に着けたことなど無いから間違った着方なんてしたら恥ずかしい。

かしこまりました、と頷いたルイザは、一枚ずつ持ち上げて解説し出した。

最高級スイートのごとき一室が今晚ばかりは自分のものだということに浮かれていた私とは対照的な、所作が美しく心遣いが細やかなルイザ。

ところが徐々に打ち解けると、実は彼女、なかなかのお喋り好きだということが分かってきた。一言私が声をかければ、二倍三倍と話題は膨らんで返ってくるのだ。しかし決して彼女の口調は騒がしく耳障りなものにはならない。

「そういえば、ヤマトはこっちでいつも何して過ごしてたの？ クラウス王子やエドガーさんは結構私たちの世界について知っているみたいだけど、ずっと話ばかり？」

「いいえ。確かにお話もたくさんさっておいですが、馬で遠乗りに行かれたり、剣術の鍛錬をなさったりして過ごされることが多いでしょうか」

私の言葉づかいにくらべるとルイザの口調は相変わらずだったが、それでも互いの雰囲気は大分フランクなものへと変化してきていた。「そうなんだ。でも王子や近衛の隊長は忙しいんじゃない？ ヤマトの相手ばかりもしてられないでしょう？」

「そうですね。近衛隊長様は特に多忙で、お三方がお揃いになるのはそう多いことではございませんけれど、殿下とヤマト様はいつも一緒においですよ」

「いつもって……ちょっとどうなのそれ」

私が苦笑すると、ルイザも小さく微笑んだ。

「お歳も近いとお聞きましたので、気がお合いになるのでしょうか。……でも、お二人の楽しそうな様子をこうして当たり前前の様にまた拝見できるようになって、本当に良かったです」

冷えてしまったお茶を取り換えつつそう言ったルイザの横顔には、少し陰りが見えた。

「それは、ヤマトがこっちの世界にまた来たから、ってこと……じやなくて？」

私の中で、何かが引つかった。

ルイザは私の反応に、何やら気まずい様子を僅かに滲ませた。

「それは……」

お茶の入ったポットを抱えたまま、その場で口ごもった。

「ねえ、どういうこと？」

「ナツキ様……」

「まさか、何か危ないことにでも首を突っ込んでいたわけじゃないよね？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9896n/>

sacred forest——聖なる森

2010年12月10日01時25分発行